

# 日本映画学会会報

第37号 (2013年12月18日)

The Japan Society for Cinema Studies (JSCS) Newsletter

発行・編集 日本映画学会 (会長 松田英男) / 編集長 大石和久

事務局 信州大学人文学部 杉野健太郎研究室内 〒390-8621 長野県松本市旭 3-1-1

事務局メールアドレス [japansocietyforcinemastudies@yahoo.co.jp](mailto:japansocietyforcinemastudies@yahoo.co.jp)

学会公式サイト <http://jscs.h.kyoto-u.ac.jp/> 学会公式ブログ <http://jscs.exblog.jp/>

## 目次

視点 映画と精神分析 小原文衛 2

視点 シネマの記憶 — ストックホルム国際映画祭 吉田祐子 4

出版紹介 7

新入会員紹介 7

事務局から 8

## ● 視点

### 映画と精神分析

小原文衛（金沢大学准教授）

二つの領域を並べたこの標題に、何らかの幻滅感、あるいはひょっとすると嫌悪感すら持たれる諸氏も多かろうと存じます。マリー・ボナパルトのエドガー・ポオ研究を嚆矢とする古典的精神分析的文学批評が行った、テキストに対する一種の暴力、すなわち「応用」という名のもとに、テキストの豊饒な意味作用を止揚して、自らの理論体系のみを読解の中に再発見する、あの還元的な言説を映画研究の世界に持ち込むことは、まさに、現代（近代？）の「ベスト」ともいべき危険な行為であるとお考えの方も同様にいらっしゃるかもしれません。ご批判はもつともでありましょう。

しかし、私は依然として、この二つの領域の一種のクロスオーバーに大変な興味を抱き続けております。「精神分析的な読み」を進化させて、この二つの領域の接触だけが生産することが可能な「意味」と「文脈」を自らの言説で囲い込みたい、という希望を抱き続けてきました。

私は英米文学の研究、主にエドガー・ポオのテキストと吸血鬼小説のテキストの精神分析的な考察に没頭してきました。映画研究と文学研究に無作為に連続性を見出すことは危険だと、もちろん承知しておりますが、私にとっての「原体験」としての物語あるいはフィクションは、スピルバーグの *JAWS*（1975）であり、それが後に文学研究への興味というかたちに具現化されたことは疑いもない事実です。少年時代に自らの意志で初めて観たいと決めて映画館に赴いた、最初の作品でした。これ以降、私は至極素朴な意味で、映画の魅力に取りつかれました（後に『グリズリー』[1976] 『アリゲーター』[1980] 『殺人魚フライング・キラー』[1982] 『アラクノフォビア』[1990] 『アナコンダ』[1997] 『レイク・プラシッド』[1999] 『サラマンダー』[2002] などの作品には無条件に籠絡されて、*JAWS* のクライマックスの再体験を追い求めることとなります。がっかりした時もありましたが）。当時はもちろん、ベトナムの悪夢を初めとする、*JAWS* のアレゴリカルな意味合いなど知る由もないわけですが、ラストシーンに「収斂」していく物語に、激しく心揺さぶられたのを今でも記憶しております。今となつては無意識的に、*JAWS* という物語が持つ一種の構造的な一貫性に大きな魅力を感じていたのかもしれません。

精神分析批評に関心を抱き始めたのは、文学を読むためのツールを求めたためでもなく、純粋に精神装置の仕組みを知りたいという欲求からでした。ただし、この精神分析というテキストの総体は、いったい自らが伝えようとしている知識にどこまで自覚的なのかもわからない体系をなしており、むしろ、何かを教えていることに関してすら無自覚なのではないかという印象をも受けたものです（今でもそ

ういう感覚は変わらず持ち続けております)。私が、一般的に還元的と呼ばれる古典的な精神分析批評の重大な問題点と認識することは、この精神分析学という「学」の(難しさではなく)ある種の「分からなさ」です。そもそも、『ハムレット』を読んでいなければフロイトがエディプス・コンプレックスの概念を構築することができなかったのと同じように、そもそも、知の特権は、テキストに、あるいはフィクションの側にあるはずだ、という強い思いが、私の中には常にあったわけです。このような意味で、ジャック・ラカンのいう「テキスト的知」は私にとっては大変納得のいく考え方でもありました。ショジャーナ・フェルマンがこのあたりの事情をうまく言語化しているように、〈文学テキストを読むことが精神分析のテキストを読むことに役立つ〉(その逆もちろんありうる)。これを私は、〈フィクションを読む(観る)ことは精神分析を知る(見る)ことに役立つ〉(その逆もちろんありうる)、と読み替えます。これは「アレゴリー」という言葉を軸にすると、〈使う言葉が違っただけで、精神分析も文学も、実は何か同じことを相手にしている(ことがある)〉、ということです。そしてむしろ、私は、フィクションに読解上の優位を与えたいのです。それはひょっとすると、原体験としての JAWS が私に与えたあの感情興奮と、幼い私のリアリティに対する態度を決定的に変更したフィクションの「力」への畏敬の念の表れなのかもしれません。やはり、JAWS は〈リアルなこと〉を語っていて、それを子供の頃の私は「感じて」いたのかもしれません。この〈リアルなこと〉を体系的な言語にしてみたいという気持ちもとても強いものがあります。

私はここ数年、映画研究と精神分析研究のクロスオーバー研究の一環としてフロイトの欲動 Trieb という概念をキーワードとした読解に関心を抱いてきました。「欲動」はフロイト精神分析の理論的な根幹をなす概念であると言えます。特に力動的な精神分析学としての精神分析にとって、一つの力、それも内部にある他者的な要素、主体の意に反して主体を駆り立てる他者としての無意識を理解する際には、絶対的に本質的な概念であると言えます。しかし、フロイト自身が実はこう漏らしているのです。「欲動というものは神話的存在であり、途方もなく曖昧模糊としています。われわれは仕事を進めて行く上に一瞬たりとも欲動から眼を放すわけには行かないのですが、そうかといってそれを鋭く見定めているという自信は全くないのです」(『精神分析入門(続)』)。精神分析にとってこの欲動という概念は、不可欠なのに、ものすごく不可解な概念だということになるわけです。私は、これまで述べましたように、精神分析批評というかたちで、文学作品の読解から得られる知識と、精神分析の文献を精読して得られる知識を統合して、(文学作品を還元主義的に読み解くのではなく)精神分析学のこれまで明らかになっていなかった部分を明らかにするという作業を進めてきました。こうした視点は、ピーター・ブルックス著『精神分析と物語』(拙訳、松柏社刊)における精神分析批評理念と軸を一つにするものがあります。

自分の読解の経験を何とか映画研究に生かせないか、という思いを胸に、現在は、映画研究の分野で、欲動概念の曖昧さにまつわる諸問題の研究に取り組んでいます。JAWS や *Alien*(1979)を欲動という概念を軸としたアレゴリーとして読解していくと、欲動という概念が生物学的な本能 Instinkt とは混同されてはならないこと(JAWS のサメは、漁師のクイントの経験的知と海洋科学

者のフーパーの生物学的な知の両方を裏切ります) や、エロスとタナトスの二項対立は維持しえないこと (*Alien* の有機体の造形はまさにそれを物語っております) など、欲動論の理解にとって多くの意義深い着想を与えてくれます。

映画を利用するというのではなく、先に触れましたように、映画を観、映画を見、映画から学び、映画を知ることを通して、精神分析研究だけをしていては決して到達できない知というものを希求したいと考えます (夢見ます)。鑑賞という意味での趣味にも、解釈という意味での研究の視点にも、まだまだ偏りがあることが否めない自分であるため、日本映画学会で多くの読み・視点を「体験」させていただき、知的な意味での鍛錬の日々を送らせていただきたいと心から願います。どうぞよろしくお願いいたします。

## ● 視点

### シネマの記憶 — スtockホルム国際映画祭

吉田祐子 (九州大学大学院比較社会文化学府国際社会文化専攻博士課程)

2011年11月、私はスウェーデンのストックホルムで開催されたストックホルム国際映画祭において、映画祭に招待される世界各国の映画監督たちのゲストホストという役を務めました。私が担当することになった女性映画監督は映画祭の短編映画部門で作品が上映されるということで、カナダからストックホルムを訪れることになっていました。映画監督の送迎は私達ゲストホストの重要な業務です。

アーランダ国際空港まで監督を迎えに行った日のことです。迎えといっても、運転免許を持たない私は、別のスウェーデン人仲間の運転する小さな青いミニカーSの助手席に座って空港へ向かうことになりました。ミニカーの側面には映画祭のロゴマークの大きなステッカーが貼ってあります。打ち合わせを済ませ、出発です。世間話に夢中になっていた二人は空港への分岐道に入り損ね、待ち合わせの時間に遅れそうになりました。とにかくスピードを上げて、約束の19時5分前に空港へぎりぎりに滑り込み、運転する彼女が車の駐車場所を探している合間に、私は監督のネームプレートを持って一目散に到着ゲートへかけ出しました。11月のストックホルムは、一日の日照時間平均はたったの6~8時間ほど。朝9時前によく日が昇り始め、午後3時を過ぎるころには日が暮れます。最高気温はせいぜい5度前後、最低気温はいきなり零度を下回るため、外気は肌を刺すような冷たさです。

私たちが道を間違えたのは、単純に標識を見落としたからです。でも私達は空港行きの標識より目が釘付けになるようなことを話している。私が日本人であることを知ると彼女は、「セーラームーンを知っているか？」と尋ねる。私は武内直子の『美少女戦士セーラームーン』のコミック、テレビアニメシリーズ、劇場版、舞台版などのことを知っている。運転席に座った彼女と助手席にいる私は、同時に前のめりになって笑い出している。外は真っ暗、空港までの一本みち。対向車は少ない。周りの風景はますます市街地のものから田舎のそれへと変わっていく（空港からどんどん離れる）。ある瞬間に、彼女と私の頭の中はこの少し昔のアニメーション映像の記憶によって強く結び付けられている。なんとも不思議な心地でした。このようにして、映像は時間や空間、たとえば日本とスウェーデンの地理の隔たりをあっさり飛び越えて、知らない者同士に寄り合い、回顧する場所を提供するのだと思うと気持ち良くなりました。映像が繋ぐ記憶、映画祭が結ぶ縁。

女性映画監督に会って話をするこの機会に緊張していた私は、彼女がこれまでに別の仕事の傍らこつこつと製作を重ねてきた経緯を聞きました。「あなたの映画はどんな物語だと思いますか？」というこちらからの質問に、彼女からは「キャベツの話！」という返答。「なるほど、キャベツの話．．．」と妙に納得してしまいました。送迎業務以外の私の仕事は、主にゲストである映画監督の全般的なお世話をすることです。英語母語話者の映画監督に英語の通訳は必要なく、彼女は映画祭期間中の自由時間はもっぱらストックホルムの街を散策したいという要望をお持ちでした。そこで私は彼女に市内の地図と、市内を走るバス、地下鉄、トラムの路線図を渡し、それから、街で美味しいシナモン・ロールと何杯おかわりを飲んでもいい珈琲を出すおすすめのレストラン、天然酵母を使うパン屋、小粒だけど味わい深いチョコレートを売るチョコレート屋、夜遅くまで軽食の取れる店、体を温めてくれる魚のスープを出す市場中の店などを紹介しました。

映画祭の期間中、私には業務時間以外のときは映画祭スタッフのIDを見せれば上映される映画を無料で見ることができるという特権がありました。私の心のなかにくすぐるある好奇心がありました。ストックホルム国際映画祭のような外国の映画祭では、日本映画はどのように受容されているのだろう。映画祭の上映プログラムの日本映画の数を数えました。それから日本的モチーフを使った映画なども目に止まりました。よし、ピンク映画を見よう。相木悟の『Underwater Love—おんなの河童—』。客席はほぼ満席でした。

夜の映画館に集う人々。ストックホルムという名の街で、Svensk Filmindustri の SF というイニシャルの紅いネオンサインを掲げたその場所の小さな空間に人が吸い寄せられる。映画館内に併設された狭いバーで、上映開始時間まで人々はおもいおもいに酒や軽食で食欲を満たす。次の欲望の対象に期待しながら。スクリーンと観客のあいだをそおつと見つめてみる。人々の横顔、光によって半分だけ照らされている。いつもは白髪と見紛うばかりの金髪や銀髪がこの空間では柔らかな銅色に見え、また、イメージから伝わる色によって赤や青、緑に一瞬のあいだだけ染められる、そして、流れていく。誰とも視線は合わない、彼らは別のものを見ている。

シネマの記憶。記憶のシネマ。私の視点の先にあったのは、ポーランド系オランダ人映画監督 Urszula Antoniak の *Code Blue*。主人公は他人の「遺物」を密かに収集しては隠し持っている。その反面、自分の痕跡を残すこと、人の記憶に残ることにさえ、嫌悪感を抱いているようだ。他者の遺物に対する極端な執着と自己への徹底した潔癖との混在。結びつきと断絶。冒頭と終わりのシークエンスは見る者の解釈を静かに遠ざける。私がこの場所から持って行くシネマの記憶と主人公の女の記憶のシネマにはそれぞれに手と足がある。歩調が合えばあいさつを交わし、手と手が触れれば、互いに微笑む。そして、自分の見つめる先に分かれて行く。

## ● 出版紹介

- 指田文夫会員（単著書） 『黒澤明の十字架 —— 戦争と円谷特撮と徴兵忌避』、現代企画室、2013年3月。
- 堀潤之会員（単訳書） レフ・マノヴィッチ『ニューメディアの言語 —— デジタル時代のアート、デザイン、映画』、堀潤之訳、みすず書房、2013年9月。
- 山本佳樹会員（共訳書） フリードリヒ・デュレンマット『デュレンマット戯曲集』第二巻、市川明／増本浩子／山本佳樹／木村英二訳、鳥影社ロゴス企画、2013年10月。
- 大地真介／杉野健太郎会員（共著書） 諏訪部浩一編『アメリカ文学入門』、三修社、2013年11月。
- 名嘉山リサ会員（共著書） 笹田直人／野田研一／山里勝己編『アメリカ文化 55 のキーワード』、ミネルヴァ書房。2013年11月。
- 塚田幸光会員（共著書） 高野泰志編『ヘミングウェイと老い』、松籟社、2013年12月。
- 塚田幸光会員（共著書） 花岡秀編『アメリカン・ロード — 光と陰のネットワーク』、英宝社、2013年12月。
- ジョン・マーサー／マーティン・シングラー『メロドラマ映画を学ぶ ジャンル・スタイル・感性』、中村秀之／河野真理江訳、フィルムアート社、2013年12月（会員外恵贈）。

## ● 新入会員紹介

- 劉韻超（東北大学大学院国際文化研究科博士課程）映画表象論
- 指田文夫（大衆文化評論家）大衆文化の評論及び紹介
- 栗原詩子（西南学院大学国際文化学部准教授）音楽学、映画神学
- 藤井達也（京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程）イラン映画、アッバス・キアロスタミ、映画製作

## 事務局から

- 会費納入のお願い：本会は、みなさまからの年会費によって運営されております。お済みでない方は、年会費納入をお願いします。公式サイトあるいは公式ブログの記載にしたがって、日本映画学会口座（郵便振替口座 00950-0-297703；ゆうちょ銀行 当座預金口座番号 0297703）へご納入いただければ幸いです。会費は、一般3千円／学生2千円です。
- 異動：登録メールアドレス、所属・職位、住所などに異動があった場合は、速やかに事務局までご一報ください。
- 出版書の惠贈：事務局までご惠贈いただければ幸いです。会報でご紹介申し上げます。
- 会報への投稿：会報は、会員のみなさまからの投稿も受け付けております。事務局まで電子メールのファイル添付にてお送り下さい。カテゴリーなどに関しては、バックナンバーを参考になさってください。書式は、学会誌に準じます。編集しやすいように、オート機能の使用などはお控えいただければ幸いです。また、統一などのために多少の編集を加えることを予めご了承ください。なお、ご投稿は随時受け付けますが、掲載時期などは編集長と事務局の判断にお任せください。